

研究テーマ

「一人一人が目標達成のために、自己調整しようとする児童生徒の育成」
～学級活動（２）における目標に対しての振り返りを充実させる工夫を通して～

令和７年度邑楽町教育研究所

授業改善研究班

I 研究テーマ設定の理由

本研究班では、まず邑楽町の児童・生徒の現状や課題について情報交換を行った。その結果児童・生徒には「自ら立てた目標に向かう過程で困難に直面した際、それを乗り越える力が十分に備わっていない」という課題があることが明らかになった。この課題の背景には、自己の行動を継続的に振り返り、課題を「自分ごと」として捉えたうえで「次にどうするか」を考える力が十分に育っていない、すなわちメタ認知能力が低いことが要因として考えられる。

この課題に対して、学級活動を通して学級活動（２）の目標である「学級での共通の課題を見だし、多様な視点から解決方法を見つけ、自己の具体的な実践課題を設定して、粘り強く努力できる児童・生徒の姿」を実現するために、どのような取組が有効であるかを考えた。検討の結果、児童生徒がくり返し自分自身の行動や目標に対する振り返りを続けていく中で自己調整力を身につけることが重要であると考えた。そこで、日々の学校生活や行事の中で自己調整ができる児童生徒を育成することを目指し、特に目標に向けた自分自身の活動に対しての「振り返り」の場面において自己調整を促す工夫を取り入れることが有効であると考えた。この視点から研究を進めるため、今回のテーマを設定した。

II 研究内容

自分で決めた目標に対しての振り返りを継続して続けていくことで、自己調整の力が伸びるかどうかを検証するために、以下の手立てを設定した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 客観的に自分を見つめることができる環境づくり○ 目標の再構築のための他者との交流 |
|---|

これらの点を踏まえて、研究班で実施した学級活動について、「つかむ」「さぐる」「見つける」「振り返る」の各段階で有効だったことを、以下の表に整理する。

[つかむ段階]

実態	教師の手立て	児童・生徒の 変容 (○) 課題 (▲)
・自分の課題を客観的に考えて見つけることができない。 ・課題に対して、なぜ解決したほうがいいのかという価値を見つけることができない。	・クラスの取組状況を客観的に把握するために、アンケートや動画・画像を用いて現状を確認することを促す。 ・自分の気持ちや行動を整理し、自己理解を深めるために、振り返りカードやワークシートで可視化する。 ・多様な視点から学びを深めるために、自分のクラス以外の人の意見を参考にするように声かけを行う。 ・他者の視点を取り入れて自己改善につなげるために、友達からの相互評価をもとに自分の行動を見つめ直す場を設ける。	○自分達で見つけられなかった課題に気づくことができた。 ○学級の課題（みんなの課題）を見つけたことで、より自分ごととして考えることができた。 ○他の人の振り返りを参考にすることで振り返りの書き方を学べたり、友達の行動を参考にしたりしながら行うことができた。 ▲教師の意図した課題と、児童・生徒が捉えた課題にずれが生じる場合があり、課題の共有の在り方に工夫が必要である。

[さぐる段階]

実態	教師の手立て	児童・生徒の 変容 (○) 課題 (▲)
・クラスや自分の課題の原因を見つけることができない。 ・見通しをもって話合いや目標設定に取り組むことができない。	・学習の記録やこれまでの取組をいつでも確認し振り返ることができるようにするために、掲示物を活用する。 ・改善点を明確にするために、改善策を具体的な行動や数値に言い換えて整理することを促す。 ・自己の成長を実感できるようにするために、振り返りシートを用いて自分の行動や友達からの記入内容をもとに目標を振り返るよう促す。 ・学びを広げ深めるために、関連する本や資料、ゲストティーチャーからの意見に触れる場を設ける。	○行動の変化以外にも、目標に向けて取り組む心情の変化も振り返ることができ、これからの取組につなげることができた。 ○表面的な意見にとどまらず、行動の理由や工夫について考えを深める姿が見られた。 ○いろいろな機関の人が関わっていることがモチベーションにつながった。 ▲改善策が抽象的な表現にとどまり、具体的な行動として整理しきれない場面があった。

[見つける段階]

実態	教師の手立て	児童・生徒の 変容（○）課題（▲）
・自分で決めた目標を意識しながら生活することができない。 ・個人の取組に対する課題や成長できたことに気づき、自分が立てた目標を見直すことができない。	・成長を感じられた生徒が継続して取り組めるようにするために、同じ目標の中でさらに上の難易度を目指すことを促す。 ・友達との関わりを作るために、ペアでチェックさせたりコメント欄に記入させたりして、友達と励まし合うよう助言する。	○自分の行動に自信をもち、継続して取り組もうとする意欲が高まった。 ○友達から評価されると自信につなげることができた。自分で思いつかないような新しい考えにふれることで、自分では考えていなかった成果や新たな課題に気づくことができた。 ▲継続した振り返りは、形式的な振り返りになりやすく、振り返りの質が低下することもあった。

[振り返る段階]

実態	教師の手立て	児童・生徒の 変容（○）課題（▲）
・現状と目標のズレに気づき、前向きに捉えて行動に移すことが難しい。 ・目標に対してのモチベーションを高く保ったまま取組を続けることができない。	・振り返りを日常的に行える環境を整えるために、教室で掲示やグーグルドライブでの共有などを行う。 ・「できたこと」と「次にやりたいこと」に視点を絞った振り返りを継続して行う。 ・これまでの取組の積み重ねをひと目で把握できるようにするために、見開き形式の振り返りシートを用いて前週と比較する場を設ける。また、友達や先生から評価やコメントを得られる欄を設けることで、他者からのフィードバックを取り入れるよう助言する。	○振り返りシートの工夫によって、前よりできた実感を味わいながら継続した振り返りを意欲的に行うことができた。 ○自分の変化や成長に気づき次の行動に生かすことができた。 ○友達のコメントから、自分がやってきたことに対して認められることで、さらにモチベーションをあげることができた。 ○友達の取組を参考にしながら、自分の行動を見直そうとする姿が見られた。 ▲振り返りの内容が感想のような記述になってしまい、行動の理由や次の改善につながらないことがあった。 ▲振り返りと次の行動を確実につなげる手立てが不十分だった。

Ⅲ 研究のまとめ

1. 成果

○断続した振り返りの仕組みを作ることで、「先生に言われたから書く」から「自分で振り返りたいから書く」児童・生徒が増えた。また、振り返りから自分の成長に気づいたり、前回の反省を生かそうとしたりする姿も見られた。

○友達からの相互評価や、振り返り資料の教室掲示やグーグルドライブでの共有、児童・生徒の言葉を学級全体で共有するなどの振り返りの工夫を行ったことから、他者の多様な考えにふれることができ、目標達成のためのモチベーションを高めながら取り組む児童・生徒の姿が見られた。

○視点を与えて継続して振り返りをさせることで、目標の達成に向けての見通しをもつことができた。それを友達と共有することが自己調整のきっかけとなった児童も多く見られた。

○振り返りが継続してできる仕組みづくりを考えていく上で、学年に合わせたワークシートづくりが大切であることがわかった。低学年において、色塗りで自身の頑張りを評価していくことは、振り返りの習慣化や自信につながったと考える。

○学級全体での振り返りの時間を作ることで、振り返る時間を大切な学習の時間と捉えるようになり、そこで学んだことを次に生かそうとする意欲が高まった。

2. 課題

●自己調整力を高めるために振り返りを取り入れた取組は有効であった。一方で、振り返りが形式的になってしまう児童・生徒も見られたことから、個々の課題や目標に応じて改善や修正につながるような、より丁寧な支援や手立てを検討していく必要がある。

●自己調整力を高めるための話合いの場の設け方について、検討する必要がある。

(どんな視点を与えるか、発問の工夫、場の工夫など。)

●ワークシート簡略化は継続して取り組むことには有効だが、自己調整の気づきを残せるような工夫が必要である。